Sketch Book　＊深緑の瞳外伝＊

璃那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｋｅｔｃｈ　Ｂｏｏｋ　＊深緑の瞳外伝＊

【Ｎコード】
Ｎ６８２９Ｋ

【作者名】
璃那

【あらすじ】
ポケットモンスター＊深緑の瞳＊の外伝、となっているけど、どうなるかは分からない短編集。
ポケモンオンリーの時もあればトレーナーオンリーの時もあるかも。
あと、最後に挿し絵をつけていく予定。
スケッチブックですから。

第６話の裏話（前書き）

好き勝手やるのがこのスケッチブック。
今回はルナの語りで、ですます調みたいになっています。

第6話の裏話

「露天の商品、ねえ」
「ルナ、ごめん。ぼくがもう少ししっかりしてたら…」
「別にいいんだけどね。お金ないの事実だし、あの引換券はなんとしてでもほしいし！」

皆さんこんにちは。
昼寝してたら何故かポケモンの世界でトレーナーやることになった、ルナです。
トレーナー、のはずなんですけど、今わたしを悩ませているのは、三日後にあるマサラタウンのお祭りだったりします。

「確かにあの引換券は魅力的かもしれないけど、博士は面倒なこと押しつけたいだけだからな。ラッキー、とか思っているに違いないよ」

彼はアッシュという同い年の先輩トレーナーです。旅には出てない、というか、博士が足止めさせて七年も地元に残っていました。

「そうなんだ…、アッシュ、なんか思いついた？」
「全く出てこないね。ルナは？」
「わたしも…なんかいいアイデアないかな～」

わたしたちが博士と呼んでいるのは、みなさんご存知オーキド博士です。
しかしこの人…いい性格しているんです。
仕事を押しつけてくるし、わたしの住所、経歴なんかを普通に偽造するし。しかもバレなきゃいいって、今まで何をしてきたんです

か？知りたいような、知りたくないような…

『ルナ、ルナ！あれやりたい！』

この子はマサラタウンの外れの森で暮らしていたイーブイの蒼夜です。

偶然出会っただけなのですが、わたしのファーストポケモンになってしまいました。

「あれってなに？」

わたしの特技は動物と話せること。生まれつきなので、理由は全くわかりません。

『水で色がじわーってなるの！』

「水で色がじわー？…あ、そっか。アッシュ！研究所ってカラーコピー機ってある？」

蒼夜、ありがとう。

若干趣味に走るけど、露店の商品が決まったよ。

わたしは研究所の庭にいます。

目の前ではケンタロスの群が走っていたり、草ポケモンがのんびりとひなたぼっこしたりしていて、自由気ままに生活しているみたい。

わたしはその様子をスケッチしています。

うーん、この色出すの難しいな。そうするとやっぱりこっちの案がいいかな～。

実は露店に出す商品はポストカードにしようかと思いまして。

絵を描くのは好きなので、苦ではありません。むしろ楽しい。

『この絵は君が描いたの？』

「そうだよーって、だれ？」

普通に答えてしまったけど、初めて聞く声ですね。

『ポケモンの言葉がわかるのって本当なんだ。あ、僕はフシギダネ。この研究所の管理人みたいなことをやってる』

「管理人かぁ、大変でしょ」

『まぁ、個性強い奴もいるけど、だいたい僕と同じトレーナーのポケモンだから。平気だよ』

個性が強いポケモン…きっとそのトレーナーも一癖あるに違いない。

類は友を呼ぶって言うので。

『失礼なことを考えただろ』

「うっそんなことないよ」

『ならいいけど。僕の仲間たちってトレーナーのことが大好きだから、気をつけた方がいいよ』

「みんなに愛されてるんだね、その人」

『恋してるの奴もいるくらいだからな』

「恋！？」

ため息をつきながら放った彼のせりふに思わず耳を疑いました、わたし。

人とポケモンの恋って…

『こいってなに？お魚？』

「蒼夜にもそのうちわかるからね。それまで我慢だよ」
『うー、ケチっ！』

頬を膨らませて怒ってしまいました。
でも、その顔も可愛いと思ってしまうのはわたしが親ばかになっているからでしょうか。
フシギダネは見回りがあるからと言ってどこかへ去っていきました。

『ルナさん、蒼夜。また今度』

日も暮れてきたので、とりあえず片づけを始めますか。

『お嬢さん、お疲れさまです』
「あ、ヨルノズク。昨日はありがとう」
『いえいえ。お気になさらずに』

彼はハンターに出会ったときに助けてくれた色違いヨルノズクです。
そういえば、この世界に来てすぐに二体も色違いに出会うなんて運がいいですねー。
ゲームじゃイベントで出てきた赤いギャラドスしか会ったことがないのですけど。

『先ほどフシギダネと話していませんでしたか？できればどちらへ行ったかお教え願いたいのですが』
「ああ、彼ならあっちに行ったけど」
『ありがとうございます。それでは、いつか私たちのトレーナーとバトルが出来るといいですね』

そう言い残して去っていきました。
私たち、と言うことはフシギダネと同じトレーナーなんでしょうか。
もしかして、フシギダネにわたしの名前を教えたのは彼なのかな。

『ルナ、この後どうするの？』
「はがきサイズで絵を描いて、それを印刷するんだよ」
『いんさつ？』
「見てればわかるよ。蒼夜も絵を描く？」
『描くー！』

研究所のポケモンたちと触れ合っていたおかげだと思いますが、近くに空想の生き物であったポケモンがいることに慣れてしまいました。
こっちにきて、まだ一日しか経ってないのに。
さて、机を借りてさっさと作りますか。

＞ｉ５７９８―９４３＜

第6話の裏話（後書き）

フシギダネとヨルノズク。
誰のポケモンかは簡単に分かりますが、あえて言わない。
ぶっちゃけフシギダネと話しておきたかっただけです。
挿し絵の画質が悪くてすみません。
ケータイのカメラ性能が良くないんです…

後悔はしていませんよ？ｂｙシギ（前書き）

アッシュたちの過去話で、挿し絵あり。
シギ目線です。

後悔はしていませんよ？ｂｙシギ

『シギってトキワの森にいたのよね』
『はい。立花さんが生まれる前にアッシュさんと森を出たんですよ』
『ゲットされたってこと？』
『いえ、私が勝手について行ったんです』
『え？』

確か五年前でしたね。
アッシュさんはまだヒトカゲだった紅と、博士のお使いでニビまで行ったそうなんです。
その帰りです。私と出会ったのは。

「いけ、キャタピー！糸をはく！」
『草ポケモンだー！しかも女の子！』
『きゃー！来ないでください！キモいです！』

私はトレーナーに見つかって必死に逃げていました。

「キャタピー、体当たりだ！」

私はさっとそれを避けて、キャタピーは近くの木に頭をぶつけました。そういえばこの木…

『あ…またやってしまいました…』

目の前には、スピアーの大群。
実はこの木、スピアー達の巣になっているんです。

『フシギダネ…前も言ったはずだ。俺たちのテリトリーにトレーナーを連れてくんじゃねえ！長老の孫でも容赦しねえぞ！』
「スピアーの巣だったのか！戻れキャタピー！逃げるぞ！」

トレーナーは逃げていってしまいました。とりあえず一安心でき…安心できませんね。
修羅のような形相のみなさんがいました。
逃げましょう。

『あの…！ごめんなさーい！』
『逃がすか！今日という今日はお灸を据えてやる！』
『いやー！』

今日は厄日です！間違いありません！

「スピアーの大群！？紅！」
『うわぁ…数多いな～。まあ、頑張るぞ！』

ヒトカゲに人間！？スピアーと挟み撃ちになっちゃいました…どうしよう！？

「紅、スピアー達に火の粉！フシギダネには当てないようにね！」
『わかってるって！火の粉！』
『げ！？火だ！退散、退さーん！』

助けて…くれたのですか？

「大丈夫？」
『無事か？』

お爺さまはおっしゃってました。

『よい人（トレーナー）に出会ったら迷わずついて行け！』と。

この瞬間、私は決めました。

お爺さま、私、この人について行きます！

「アッシュよ…そのフシギダネはどうしたんじゃ？」

「トキワの森で虫ポケモンに襲われていたのを助けたんですけど、そしたらなんか、気に入られちゃったみたいで…」

「サトシもそうだが、なんでお主等はポケモンに好かれやすいんじゃ？羨ましいのう」

「博士がポケモンに好かれないのは自業自得だと思いますけど…」

何回か森に帰るよう言われましたが、なんとかアッシュさんの町まで来れましたね。

『なあ、ここまで来ちゃったけど大丈夫なのか？トレーナーはどうしたんだ？』

『私野生ですので心配ご無用です』

『なら大丈夫…な訳ないじゃん！家族は？』

『お爺さまならわかってくれます！』

『そういうものなのか？』

そういうものなんです。

『ところでアッシュさんはモンスターボールをどこに閉まっているのですか？』

『確かリュックの右に付いたポケットだったと思うけど？どうし

てそんなこと聞くのさ』

右ですね。あ、見つけました。確かこのボタンを一回押すと大きくなるんですよね。

『おい、フシギダネ、お前まさか…』

そして、二回目で入れるんでしたね。

『ポチッとな♪』

これでＯＫです。お爺さま、私やりました！

「ぼ、ボールに入っちゃった…」

「…フシギダネ、ゲットじゃな」

『新しい仲間ってことでいいのかな…』

『そうして、私はアッシュさんのポケモンになったのです』

立花、だいぶびっくりしてますね。

『行動力ありすぎでしょ！』

『まあ、そう言わないでくださいな。まだ子供だったんですから』

『後悔とかしたことないの？』

『ありませんよ。むしろあのときついて行かなかったら、私今頃後悔しています』

アッシュさんは優しい方ですし、紅も仲間思いの素晴らしい方です。私、みなさんと一緒にいられてとっても幸せです。

>i8000_943<

後悔はしていませんよ？ｂｙシギ（後書き）

アッシュとどうやって出会ったのか。これが前から書きたかったんですが、紅目線だと書けなかったのでしばらく放置。
しいちゃんの目線にしたらあら不思議。
大学に向かうバスの中で話ができてしまいました。

絵の方はアッシュと紅が描けていませんが、きっとだいぶ先になると思う。
フシギダネは初描きなので、おかしくてもツッコまないでいただきたい。
それでは。

せっかく海に来たのよ！？ｂｙ立花（前書き）

お久しぶりです。
なんというか…ごめんなさい。たいした文も書けていません…
今回は、立花視点でお送りします。

せっかく海に来たのよ！？ｂｙ立花

「海だー！」
『うみだー！』

目の前には白い砂浜に青い海。
あたしたちはカントーのリゾート地、アオプルコに来ていた。

『わーい！』
「ちょ、蒼夜！」

ルナが止めるのも聞かないで、蒼夜は海の方へ駆けていってしまった。
すると大きい波が来て海水を浴びてしまう。全くあの子は…

『うえぇ、しょっぱーい…』

はぁ…。お約束をありがとう。

「これで口を洗いなさい」
『はぁーい』

ルナが水を出してあげて、蒼夜は口を洗う。

「おーい！パラソル借りてきたよー！」
「うん、ありがとー！」

パラソルをたてて、ビニールシートを敷いてっと。
あたしに手伝うことなんてないけど。

「準備完了！着替えてくるから、蒼夜のことお願いね」
「わかった。任せておいて」
『何でボクだけ！？立花は？』

あなた、今さっきやらかしたからじゃない？
そして、数分後。

「お待たせー！」
「お…お帰り」
「…やっぱり変かな？」

ルナの水着は、レモンイエローのビキニ。
あたしが選んだのよ！ルナは恥ずかしい言っていたけどムシ！

「いや、そうじゃなくて…！」
「？」
『アッシュ顔赤いよー』

盛大にため息が出てしまった。

『いい加減ルナも気づけばいいのに』
『アッシュさんもアッシュさんですし』
『ちょっかい出してみるか？』
『止めときましょう。アッシュさん怒るとすごい怖いですから』

そうみたいね。
あたしはその場面に遭遇していないから分かんないけど。
あれ？この紙は…

『…いいこと思いついた！』

久しぶりにおもしろいことになりそうね！
ちょっと紅、何ため息ついているのよ！？

『ねぇルナ、これ見てよ』
「んー、どうしたの？」
「何々…日焼け美人と仮装ポケモンコンテスト？」

二人に広告を見せた後、あたしは爆弾発言をした。

『そう言うことで、二人の名前で出しといたから』
「え？」
「なんて言ってるんだ？」
「わたしたちの名前、これに出しちゃったって…」
「ええー！」

驚いてる驚いてる。

『これアッシュ着てね！あと、こっちがエントリーナンバーだから』

そしてあるポケモンの着ぐるみと、８と書かれた札を渡した。

「立花…それどこから出した？」
『企業秘密よ。それじゃ行くわよ！早くしないと始まっちゃうわ！』

「さあ今年も始まりました、日焼け美人と仮装ポケモンコンテスト！トロフィーはいったいどのペアの手に渡るのでしょうか？では

いきましょう、エントリーナンバー1番、エリさんとタカさんでーす！」

始まったわね。まあ、どんな人が出てもルナたちには勝てないわよ。

なんでって？あたしのトレーナーだからに決まっているでしょ？

『なんでそんなに自信たっぷりなんだ？』

『さぁ？あ、この人達の次ですね』

あ、もうそんなに進んでたの？

「続きましては、エントリーナンバー7番！」

長い赤い髪の女性と青い髪の男性か。男性はニャースの格好になっている。

…なんか、見たことある組み合わせね。

「次のペアでいよいよ最後！エントリーナンバー8番、ルナさんとアッシュさんです！どうぞ！」

「立花…なんでわたしたちを出したのかな？」

「やっぱり恥ずかしいな…これ…」

アッシュに何になってもらったかって？

決まっているじゃない、ピカチュウよ！何よ、別にいいでしょ！

「これで全員出そろいました！さあ栄冠はどのペアに輝くのでしょうか？」

トロフィーはあたしたちの物よ！

ふと目をトロフィーに向けると…ない！？

『どういうこと！？』

爆発が起き、白い煙の中から現れる人影。

なによ、この笑い声…むかつく。

「なんだかんだと言われたら」

「答えてあげるが「やっぱりロケット団か」セリフを言わせろよ！」

「そうよトラップガール！人の話は最後まで聞きなさいって親に習わなかったの！」

「ポケモンで悪さしているおばさんたちには言われたくないよ！それと変装下手過ぎ！」

ルナってば見抜いていたの？さっすがあたしのトレーナー！

「誰がおばさんですってぇ！」

「ムサシ落ち着けって！」

「そうだニャ！この小説はアニメから六年後だから三十路にそろそろなる「あたしは一七よ！」殴らないでニャ！」

「とりあえず…トロフィーは手には入ったから…」

「「「帰る！」」」

いつの間に用意したのかわからない気球に乗って、逃げていくトリオ。

さぁて、あいつら片づけようか。

『蒼夜、手助けして』

『うん、わかったー！』

それじゃあ、逝ってらっしゃい。

『十万ボルト！』

あたしの攻撃は真っ直ぐロケット団に向かう。

「あ、電撃…」

そして、その電撃は気球を破壊した。

「今回はバトルもなしかー」
「あたしのトロフィーが！」
「ムサシ、あきらめるニャ…」
「「「やな感じー！」」」
『ソーナンス！』

トロフィーはあたしが回収した。
その後、普通にコンテストは進行して…

「優勝は…エントリーナンバー８番、ルナさんとアッシュさんのペアだー！」

やっぱりね。あたしが認めたトレーナーなんだから当たり前よ！

「ゆ、優勝しちゃったね…」
「うん…もうこれ、脱いでいいかな…？」
『優勝ー！ルナたちすごいねー！』

あー、もう。

せっかく優勝したんだからもっとくっつきなさいよ！バカップルみたいに！
それと蒼夜、邪魔よ！
ん、誰？理不尽だって言ったの！

『立花、それくらいにしといてあげて下さいな』
『やだ。もうちょっとなの！』
『…立花…』
『…！わかりました。止めます…』

結局…あたしたちのトレーナーに進展はなかった。
あーあ。つまんないの。

おまけ

『お前十万ボルトって使えたっけ？』
『使えないわよ。ノリよ、ノリ』
『あ、そう…』

おしまい。

＞ｉ１０６９４｜９４３＜

せっかく海に来たのよ！？ｂｙ立花（後書き）

はい、立花暴走の話でした。
夏らしく海の話でもかと思ったんだけど…関係ない気がしてきた。
まあいいや。イラストの話をしましょう。
アッシュと紅が初登場ですね。
今回はデシカメで撮った写真を加工しているからいつもよりは画質は良いはず。
ペンタブがほしいよー！

立花「ちょっと！あたしにも話させてよ！」

それから…立花は十万ボルトも波乗りも覚えていません。
それでは。

立花「ちょっとー！」

風といっしょにｂｙルナ（前書き）

いろいろあって一日遅れてしまった…

風といっしょにｂｙルナ

歩きつづけて　どこまで　ゆくの？
風に　たずねられて　たちどまる

本日、九月十五日はわたし、クスノキ　ルナの誕生日です。
…うん、まさか異世界、それもポケモンの世界で誕生日を迎えることになるとは思ってもみなかったよ。

「紅、切り裂く攻撃！」
「オニスズメ、つつく攻撃だ！」

この環境に慣れてきているわたしを感じて、人間って意外と何があってもやっていけるものだな～って思う。
え？はじめからだろ？…そこつっこまないでよ。

「今だ！火炎放射！」
「オニスズメ！」
「やった！紅、お疲れ！」
「負けた…でもいいバトルだったな！」
「うん。また勝負しよう！」

旅をするのは嫌いじゃない。みんなと一緒にいるのはとっても楽しいよ。
でもアッシュのように、ほかのトレーナーのように、ジムに挑戦して、リーグを目指して…
それもいいかもしれないけれど。

今まで目指していたものは？あきらめるしかないのかな…

ここに来るまで、わたしは鉛筆や木炭が手や顔に付いても気にせずに、美術の勉強をしていたんだ。

毎日先生にプレッシャーをかけられても、わたし自身で決めたことだったからあきらめなかった。

絵描きになろうとがんばっていた。小さなときにおばあちゃんとした約束を果たすために。

ああ、そういえばこっちに来る前にお墓参りしてない。もう出来ないのかな。

お母さんとお父さん、今何しているかな…

「ルナ！」

「は、はい！」

「ルナ、大丈夫？ぼーっとしていたけど」

「な、何でもない！」

「本当？疲れているなら休憩するよ？」

「だから！何でもないってば！」

あー、わたしのバカ！アッシュ心配してくれていたのにあんな態度とるとか、本当にだめな人間だよ…

…蒼夜も立花もアッシュの側にいるし…少しだけ離れてもいいよね？一人になりたい。

「どうかしましたか？」

「誰？」

そう思って離れたところに見るからに怪しい人がひとり。

というか何ですか？そのハープ…ミュウかな？

「すみません。落ち込んでいるようだったので、つい…。わたしはナオシ、旅の吟遊詩人です」
「ふーん」
ナオシ…どっかで聞いた名前だけど…なんだっけ。
「話してくださいませんか？話すことで楽になることもありますから」
「なんで見ず知らずのあなたに？」
ほっといてほしい。
「ここで会ったのも何かの縁じゃありませんか」
おばあちゃんも言っていたっけ。縁は大切にしなさいって。
少しだけ、話してもいいかもしれない。
「…どうすればいいのかわからないんです。前に目指してきた道をとるか、トレーナーの道をとるか」
すると、ナオシさんはすぐに答えてくれた。
「両方目指せばいいと思いますよ。わたしもトレーナーとコーディネーターを兼業してますし」
二足の草鞋か。中途半端な気がするけど。
「それは貴方次第です。わたしが言えるのは、どちらで経験したことも、全てわたしの糧となっていることです。片方だけではわからないことも多いですから。トレーナーとしての経験も、きっとあ

なたの役に立ちますよ」

わたし、すごい初歩的なことを忘れていた。

技術を追求すれば、確かに『上手い絵』は描けるようになる。だけどいろんなものを見て、聞いて、経験をしないと『良い絵』は描けない。…先生に何度も言われたじゃない。

「そうだよね、両立させればいいだけじゃん。ありがとうナオシさん。なんか吹っ切れた」

悩んでいたのがバカらしくなった。

「それは良かったです。それでは、わたしはこれで。いつかバトルしましょう」

「ええ！楽しみにしています」

みんなのところに戻ると、アッシュがこちらに駆け寄ってきた。

「ルナ！よかった、どこに行ったかと思ってたんだ」

「…ごめん」

わたしって、迷惑かけすぎだよね。

「さっきのことだけど…元の世界のことを思い出していたんだろう？」

「…うん」

でも、今までみたいに専門的に勉強はしなくても、絵は意欲があればいつでも描ける。

「寂しいだろうし、帰れる保証もないけどさ。今は…今は一緒にこの世界を旅してみようよ」

それに、今は同じ夢を持つ仲間がいる。

「大丈夫、迷うのは辞めたから。これからも…よろしくね」

迷うより、前に進む努力を。

「こちらこそ！それと…誕生日、おめでとう」

「…ありがとう」

歩きつづけて　どこまで　ゆこうか
風と　いっしょに　また歩きだそう

大地ふみしめ　どこまでも　ゆこう
めざした　あの夢を　つかむまで

（『風といっしょに』から引用）

＞i115225－943＜

風といっしょにｂｙルナ（後書き）

ルナの誕生日の話でした。
「風といっしょに」を引っ張ってきたのは気分です。先々週くらいにアニメでも流れたし。

蒼夜「今回ボクたち一言もしゃべってなーい！」
シギ「私なんて名前も出てきてません…」

今回はルナとアッシュを書きたかったんだ。
そしたらポケズが誰もしゃべっていなかったという＾＾；

立花「ところで、なんでナオシが出てくんのよ。」

ルナの悩みと同じような悩みをかつて抱いていたから、ですかね。

紅「本当は無印時のゲストキャラをあまり覚えていないだけだろ」

そ、そんなことないさ。
さて、雑談はこれまでにしますか。それではみなさん、ご一緒に。

ポケズ「ルナ、誕生日おめでとう！」

灰色と月　ｂｙアッシュ（前書き）

こんな小説が一周年記念で大丈夫か？

灰色と月　ｂｙアッシュ

十歳になってからも、ぼくはマサラタウンに残っていた。
主に、というか全て博士のせいだけど。

「六年経ってやっと旅に出られるなんてね…」
「リザ…」
「紅（こう）、ありがとう。ごめんな」

博士にもらった相棒は、既に一つ目の進化を迎えていた。
ぼくや博士に振りまわせれて苦労してただろうなぁ…

「そろそろ行こうか、あまり待たせるのも悪いし」
「リザ！」

あの子は突然ぼくの目の前に現れた。
何故か夜遅くに森にいて、野生のポケモン達といっしょにハンターと戦っていた。
そして、何故か博士は彼女といっしょに旅に出るようにぼく言った。

「ダネ、ダネフッシ！」
「え、アッシュのことどう思っているかって？」
「ダネダネ！」
「それは…」

ポケモンと言葉を通わせることが出来る人。
ポケモンがいない世界からやってきた少女。

ルナ。
それが彼女の名前。
「あ、アッシュ！準備出来たの？」
「ああ！待たせてごめん。シギの面倒見てくれてありがとう」
「いいんだよー、いろいろ話してただけだから。蒼夜、そろそろ行くよー！」
「ブイ！ブイー！」
深い森のような瞳をした異世界の少女とともに、ぼくは夢への道を歩き始めた。
君はぼくの気持ちに気づいてないだろうな。
＞ｉ１５２８４―９４３＜
おまけ
「立花ー！出発するよー！」
「どこ行っちゃったのかな…」
キョロキョロと黄色のポケモンを探していると、突然ルナがよろけた。
ぼくが慌てて支える。するとちょうど笑っている立花の姿を見つけた。
確信犯だな、これは。
「あ、ありがとう」
そうとは知らないルナは謝りながら見上げてくる。思わず、その

顔に見入ってしまった。
いつも思うけど、彼女の瞳はきれいだ。まるで、宝石のようにきらきら輝いている。

「ピカ！ピカチュピカ～？」
「え？あ…ごめんアッシュ」

立花が何か言ったのか、ルナの顔が見る見る内に真っ赤になる。
慌てふためいてぼくから離れた。
ちょっと残念。

「ピッカァ？ピカ、ピカチュ！」
「立花！」

今度は何を言われたのか、少し涙目になって怒っていた。
それをかわいいと思ったのはルナには内緒だ。
＞i15283—943＜

灰色と月　ｂｙアッシュ（後書き）

そういえば。

ルナ「どした？」

ポケモン小説の中で始めて鳴き声書いたかも。

ルナ「そういえば。アッシュ視点からじゃないと書けないよね、この小説。ところでさ」

何？

ルナ「最後の何？」

課題が多すぎてむしゃくしゃして描いた。
いろんな意味で糖分が欲しかったんだ。

ルナ「だからって描かないでよ！」

気にしない気にしない。
それでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6829k/

Sketch Book　＊深緑の瞳外伝＊

2010年12月28日10時25分発行